

主 題：救いは信仰のみによる2

聖書箇所： ローマ人への手紙3章21-26節

「信仰による救い」ということをパウロは教え続けています。このローマ書1：16-17で「福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。……『義人は信仰によって生きる。』と書いてあるとおり」だと彼は言いました。そして、前回見た3：21のみことばでは「しかし、今は、律法とは別に、…神の義が示されました。」と語っています。皆さんお気づきのことと思いますが、パウロはこうしてこの「信仰による救い」ということの説明をより明確にしています。どういうものなのか、どのようにして人は救われるのかということを彼はより詳細に教え続けているのです。

人は行ないによって救いを得ることができるのか？パウロはそれに対して真っ向から否定しました。救いは信仰によってのみ与えられるのだと言います。今日、私たちが見ようとしている22節からは、読者のだれひとりもこの救いに関して間違わないように、彼は救いに関して二つのことを私たちに教えてくれます。

☆信仰による救い

1. イエス・キリストによる救い

一つ目にパウロが言うことは、この救いというのはイエス・キリストによる救いであるということです。22節には「すなわち、イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、」とあります。信仰の対象はイエス・キリストだということを彼は明らかにします。イエス・キリストがお生まれになるという預言をマリヤが聞いた時、彼女自身も、また、夫と決まっていたヨセフもそのことに驚きました。そのヨセフに対して御使いが現われてこのようなことを言います。「マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。」（マタイの福音書の1：21）。救世主が生まれた、私たちに罪から救い出してくださる救い主がこの世に来てくださった、それがイエス・キリストであるということを明らかにするのです。この22節のみことばを見ると、パウロは「救い」とはどのようなものなのかということをお話しています。「救いとは神の義をいただくこと、神の義を受けること」とパウロは言います。「神の義、義」ということばは私たちは日常余り使うことはありませんが、このことばは神学辞典を見ると、ヘブル語の「ヤシャー」ということばから来ていて「真っ直ぐ」という意味を持ったことばです。また、このことばはギリシヤ語の「正義、正しい」という意味を持ったことばから来ています。ですから、「神の義をいただく」ということは「神の正義、神の正しさ」をいただくことであり、ゆえに、罪人は救いを受けるのです。神の義、神の正しさをいただいたときに、その罪人は神の前に「義、正しい」と認められるのです。5：1でパウロが語っています。「ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。」、神の敵として神に逆らい背いて歩いて来た罪人が、その時にこの正しい神と和解することができる、これが救いであると言うのです。神の義をいただき、この正しい神と私たちが和解することができる、そのようにパウロは私たちにこの救いというものを教えるのです。どのようにしてこの救い、神の義を受けるのか、それは信仰によっていただくのだとパウロは言います。

皆さんはもうそのような誤解をしないと思いますが、私たちの周りにおいて、余りにも多くの人々は一般的に「洗礼」と呼ばれているバプテスマを受けることによって救われるとか、教会の教会員になることによって救われるとか、献金をするによって、また、奉仕をすること、慈善活動を行なうこと、礼拝や集会に忠実に出席すること、また、あらゆる良いと思われることを行なうことによって、神はあわれみをもって私たち罪人を救ってくれるのではないかと、神の義を与えてくれるのではないかとありますが、それは聖書の教えではありません。どのような良い行ないも私たちに神の義をもたらすことはないのです。信仰だけがこの義、救いをもたらすと言います。そのことをパウロはこの3章の中で繰り返し教えます。今私たちが見たように、22節「信じる信仰による神の義」だと言います。26節を見ると「イエスを信じる者を義とお認めになるためなのです。」と言います。28節を見ても「人が義と認められるのは、…、信仰によるというのが、私たちの考えです」と語っています。30節でも「信仰によって義と認めくださるのです。」とあり、繰り返し、繰り返し、パウロはその真理を教え続けているのです。

A. 信仰を得る方法

1) 真理を知ること

ここまで見て、確かに信仰によって救われるのだということは分かりました。でも、多くの人々が誤解してい

るのは、この救い、義をもたらす信仰をどのようにして得ることができるのかということです。なぜなら、これに関していろいろな考え、いろいろな教えがあるからです。どのようにすればこの神の義をいただくことができるのか、どのようにすればこの救いを私たちは得ることができるのでしょうか？まず大切なことは、私たちは真理を知ることが必要です。当然のことです。間違っただけを知っていても何の意味もありません。真理、正しいことを知らなければいけません。

a) 自分自身について正しく知る

まず、私たちは自分自身について正しく知らなければいけません。私たちはいったいどのような存在なのでしょう？私たちひとり一人は神の目にどのように映っているのでしょうか？まさにそのことをパウロは私たちに教え続けてくれました。前回も見たように、1章から3章まで、パウロは私たちに私たちがいかに罪に汚れた存在であるかということを教え続けました。私たちのうちには全く良いところがない、神の前に喜ばれるところが全くないということを、パウロは私たちに明らかにし続けてくれたわけです。ですから、私たちが知らなければいけないことは、私たちは神に背き、神に逆らい、神に敵対しているゆえに、その罪がさばかれるのだということです。また同時に、救いに関して罪の赦しに関して、自分ではどうすることもできない絶望的な罪人であるということを知ることが必要です。あなたはどんなに努力しても、どんなに頑張っても、どんなに心を入れ替えても、あなたの行ないによって神の義を得ることはありません。救いを得ることは絶対にないのです。ローマ6：23は「**罪から来る報酬は死です。**」と言います。罪を犯している者は必ず神の審判を受ける、さばきを受けるということです。そして、このさばきに関して私たちがどうすることもできないことを、ヘブル人への手紙の著者は9：27で「**そして、人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっているように、**」と言いました。そして、このさばきに罪人が服する時、それに対して罪人は何もすることができない、ただ自分の罪のさばきを受けるしかない、そして、その後待っているのは永遠の滅びでしかないのです。ですから、まず私たちは自分自身に対して正しく知る必要があります。

b) どのような神かを知る

二つ目に私たちが知らなければいけないのは神についてです。もう少し細かく言うなら、父なる神という方がどういうお方なのかということです。神というと父なる神、子なる神、そして、聖霊なる神、この三位一体の神のことですが、どのような神なのかということを知ることが必要です。神とはすべてのものをお造りになった創造主であり、そして同時に、この方は全く聖い罪のないお方です。全く聖い正しい方だからどんな罪も憎まれるのです。残念ながら、このような脅威というものは現在において余りポピュラーではありません。神の聖さ、神の正しさについて余り語られることがありません。どちらかというと、神の愛や恵みだけに焦点が当てられているようです。でも、私たちが神が創造主だということを知れば、造られた私たちはこの神に対して責任があることに気づきます。神が正しい聖い方だということが分かれば、では、その神に対して自分はどのように生きているのか、当然、この聖い神は聖くない私の間違っただけの行ないに対して、その生き方に対して問われるということを知ることができます。ペテロがIペテロ1：15で「**あなたがたを召してくださった聖なる方にならって、あなたがた自身も、あらゆる行ないにおいて聖なるものとされなさい。**」と言いました。このみことばをよく考えていただきたいのです。あなた方を召してくださった聖なる方、聖い神のことです。その神が私たちに「**あらゆる行ないにおいて聖なる者とされなさい**」と言うのです。聖い神は私たち一人ひとりに対してすべての点において聖くあることを望んでおられるのです。16節ではこう言います。「**それは、「わたしが聖であるから、あなたがたも、聖でなければならぬ。」と書いてあるからです。**」と。旧約聖書のみことばを引用しながらペテロはこのように言うのです。聖い神は私たちに完全な聖さを要求しているのです。そのような神が存在されるのです。

c) イエス・キリストについて正しく知る

同時に、私たちは子なる神イエス・キリストについて正しく知る必要があります。彼は永遠に神であり、彼は主の主であられ、そして、人となられた神であるということ。人となられた彼は、ただ一つの点を除いて私たちと同じでした。渇きを覚えたし、疲れを覚えたし、痛みを感じたし、悲しみを覚えました。ただ彼が私たちと違ったところは何かというと、彼のうちには全く罪がなかったことです。だから、私たちの罪をその身に負って身代わりとして死ぬことができたのです。このイエス・キリストが十字架で身代わりに私の受けるべき罪のさばきを受けてくださって、三日後に約束どおりよみがえってくださった。そのことを通して、この方が神であり、この方が救い主であり、この方を信じるすべての者を救うことができるということを明らかにしました。私たちはそのことを知る必要があります。神のおことばは私たちにそのことを明らかにするからです。

d) 神が与えてくださった約束を知る

同時に、私たちが知らなければいけないのは、神がどういうお方かだけでなく、どのような約束を私たちに与えてくださっているかということです。驚かれるかもしれませんが、神が私たちに素晴らしい約束をたくさんくださっているにもかかわらず、クリスチャンたちがそのことを知らずに日々の生活を過ごしているケースが多いのです。私たちはこの約束によって生きることができます。この約束によって、私たちは感謝をもって歩むことができます。どのような約束を神が与えてくださったのか、私たちはそのことも知る必要があります。その中の一つ、このイエスを信じる者に神は神の義を与えてくださるといふ約束、救いを与えてくださるといふことを私たちは知ることが必要です。

2) 神の命令に従って歩む

私たちがこのような真理を知った後、何をするのでしょうか？私たちはこの神の命令に対して、それを心から受け入れて従って行く必要があります。どのような命令を神は与えているのでしょうか？罪を悔い改めて主イエスを信じなさいというのです。これが神の命令です。使徒の働き 17:30 でパウロはこのように言いました。アテネにいたパウロは「**神は、そのような無知の時代を見過ごしておられました、今は、どこでもすべての人に悔い改めを命じておられます。**」と言っています。「悔い改め」というのは今の時代の人々に対してのものではないのでしょうか？とんでもありません。パウロはアテネに行った時に、あの異教の中にいる異邦人たちに対して、その罪を悔い改めなさい、それが神の命令であるということをはっきりと話しました。また、使徒の働き 26:20 でアグリッパ王に対しても、彼は今まで「**ダマスコにいる人々をはじめエルサレムにいる人々に、またユダヤの全地方に、さらに異邦人にまで、悔い改めて神に立ち返り、悔い改めにふさわしい行ないをするようにと宣べ伝えて来たのです。**」と言っています。ですから、神の命令というのは明らかです。神はすべての罪人に、その罪を悔い改めて神に立ち返るようにと命じておられます。ですから、私たちも人々にそのように語るべきだし、それを聞いた一人ひとり、自らの罪を神の前に心から悔い改めて神に従うことが必要なのです。神に逆らって来た私たちがその罪に背を向けて、神に従うことを決心するのです。この主を自分の人生における最高の権威者として認めて、この方の権威に従って行こう、この方のみこころに従って行こうとするのです。これまで自分が信頼を置いてきたものを捨てて、神のみに信頼を置いて生きて行こうとするのです。

ロイドジョーンズ博士は、信仰に関してこのようなことを言っています。「信仰には次の三つの面、あるいは三つの要素が含まれる。それは真理を知ること、真理に同意すること、真理に信頼することである。真の信仰には常にこの三つの要素がある。信仰について考える時にはこの要素のいずれかをも決して省いてはならない。ことばを変えると、信仰とは真理を知覚的に認識することではない。あるいは、真理を知覚的に受け入れるだけのことでもない。そうしたものがあっても、信仰を持たずにいることはあり得るのだ。」と。どんなに知的に物事を認識していたとしても、頭だけの信仰は神の義をいただく信仰にはならないということです。どんなに頭で分かっているとしても、それが神の義を、神の救いをその人にもたらすかということ、そうではないということです。「信仰とは心底からこの方を信頼し、この方が私たちのかわりに、また、私たちの救いのために行なってくださったことを信頼するということである」というのです。このことについて皆さんが誤解しないために、別のみことばを見ながら、これがどういうことなのかをもう少し見て行きましょう。

B. 救いへの招き

どうすれば神の救いを得ることができるのでしょうか？その前に、確かに神はすべての罪人に救いの機会を与えておられます。問題はその機会を逸する前に救いにあずかることです。イザヤが「**主を求めよ。お会いできる間に、近くにおられるうちに、呼び求めよ。**」とイザヤ書 55:6 で言いました。この救いをいただくことのできる間に、遅くなる前に、手遅れになる前に、いただきなさいと言います。今、私たちは救いについて、それは真理を知ることであり、その真理とはどういうものなのか、そして、それに対して神の命令に私たちは従って行くべきこと、神に背いて来た私たちが罪を告白し悔い改めて、そして、神を受け入れてその方に従って行くのだと見て来ました。このことに関して、よく皆さんご存じのみことばですが、イエスが「**だれでもわたしについて来たいと思うなら**」と語って教えられたマルコの福音書 8 章のみことばを見てください。その中で、イエス・キリストご自身がこのように救いのメッセージを語っておられます。34 節「**それから、イエスは群衆を弟子たちといっしょに呼び寄せて、彼らに言われた。『だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。』**」と。イエスはこのように救いに対する招きをなさったのです。救いに関する招きです。では、どうすればこの本当の救い、神の義を罪人は得ることができるのでしょうか？

1) まず、救いを得たいと願うこと

「**わたしについて来たいと思うなら**」と言われました。つまり、まず最初の条件は、私たちがそのことを望むこと

です。どんなにすばらしい救いを神が備えてくれたとしても、それを望んでいない人はその救いのもとに出て行くとはしません、救いを得ようとはしません。悲しいことに、多くの罪人がそうです。確かに、私たちもかつてはそうでした。こんなにすばらしい救いを神が備えてくださったにもかかわらず、私たちはそれが自分には必要のないことだと思っていました。けれども、神は私たちの心を変えてくださったのです。ですから、少なくともまず私たちが知るべきことは、この救いを受けようとするなら、神の義をいただくとするなら、そのことを心から望むことが必要です。

2) 自分を捨てる

「**自分を捨て**」とあります。イエスがここで言わんとしていることは、これまでの自己中心的な生き方、自分の自我、自分勝手な神を無視した生き方への決別です。これまで私は自分のために生き、自分のことを優先して生きて来た、そのように創造主なる神を無視した間違っただけの生き方に対して、もう私は十分だ、私はこのような神の前に間違っただけの生き方を止めるのだと決心することです。しかもこれは、繰り返し行なうことではなくて一度きりのことです。そのような時制を使っています。イエス・キリストを10回も20回も信じましたというのは、どこかおかしいのです。イエス・キリストを信じる、それは1回きりのことです。救いは一度与えられたら失うことがありません。本当の救いをいただいた人は、その救いを絶対に失うことがないのです。でも、あえて今言ったように、本当の救いをいただいた人に限ってということです。残念ながら、いただいたと思っている人、思い込んでいる人がたくさんいるということです。だから、私たちはしっかりとみことばに立たなければいけないのです。イエスが言われたこの救いの招きに対して、私たちが学ばなければいけないことは、私たちは神を中心とした生き方をしていなかったということです。神に従う生き方などしていない、自分が中心だったのです。そのような間違っただけの生き方から私はもう決別するというのです。

3) 自分の十字架を負う

救いは簡単ではありません。次を見てください。「**自分の十字架を負い**」とあります。聖書のどこを見ても「救いとは非常に簡単なものだ」とは教えていません。イエスを信じてイエスに従ってこの救いをいただくということは非常に大変なことです。「狭い門から入れ」とイエスは言われました。救いは非常に門戸の狭いものです。なぜなら、イエスを信じることによってさまざまな障害や問題がやって来るからです。これまでになかったいろいろな摩擦を経験するからです。神に忠実に生きようとするとうどうなるでしょう？キリストにあって敬虔に生きようとする人はどうなるでしょう？Ⅱテモテ3：12で「**確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようとする者はみな、迫害を受けます。**」とパウロは言います。あなたが神の前に正しくあろうとすればするほど、あなたは迫害を受けるのです。人々から攻撃されるのです。ですから、イエスがここで言われたのです。自分を捨てるだけではない、自分の十字架を負って、いかなる問題があろうと、いかなる苦しみがあろうと、私はこのイエス・キリストを信じてこの方に従って行こうと決心するのです。今現在、語られている「福音」と言われるメッセージとはかなり違うと思いませんか？この「**十字架を負って**」というのは、この当時の人々にとってはすぐに連想できることでした。なぜなら、その当時、確かに十字架を負って歩いている人々がいたからです。これは今の時代に、その当時のそのような状況を再現しようとして行なっている人々ではありません。この当時、確かに十字架によって処刑される犯罪人たちがいたのです。この死刑囚は町を歩いてその刑場まで自分の架かる十字架の一部を自分で背負って行ったのです。恐らく、イエスがそうであったように。この行為は何を意味したかということ、ローマに対する彼自身の降伏を現わしたのです。自分自身の敗北を認めて服従するということです。またある人は、この行為は無言のうちローマが自分に下した刑は正しいことを容認していると言うのです。私はこのように処刑されて当然だと。そうするなら、イエスがここで言われたことは、先ほどの「**自分を捨てる**」ことから当然関連しているのですが、私たちはどのようなことを神から望まれているか、私は神に対してすべての点において降伏すると言うのです。「神さま、私はこれまで自分に従って自分の思い通りにあなたに逆らいながら生きて来ました。私は間違っていました。そして、私はそのような生き方を止めて、あなたに従って行きます。あなたが私を有罪だと宣告される、その宣告は正しいです。確かに、私は有罪にふさわしい人間であるし、あなたの前にさばかれてしかるべき存在です。」と。神に対して謙虚に、そして、へりくだって神を見上げているのです。この神に対して、あなたは神です、あなたの言われることは正しいです、そして、私はこれまであなたに逆らってきましたが、私はこの間違いを改めて、今、あなたに従って行きたいと、これは服従の態度です。そのようなメッセージをイエスは語られたのです。

イエスがある律法の専門家から「**すべての命令の中で、どれが一番たいせつですか。**」と質問されたことがありました。マルコの福音書12章にこの話が出て来ます。一人の律法学者がイエスの話を聞いていて、そのような質問

をしました。ユダヤ教の教師たちは、神がシナイ山でモーセに613の命令を与えたと教えていましたが、その中で最も大切な命令はいったい何かという、その点において一致していなかったのです。彼らはこのようなことをいつも議論していたのです。そこでこの律法学者はこの議論をイエスにぶつけてみたのです。どの命令が一番大切なのかと。それに対するイエスの答えは、29-30節『イスラエルよ。聞け。われらの神である主は、唯一の主である。:30 心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』でした。私たちが考えること、計画をすること、私たちの意志や行動をコントロールする場所は「心」です。「思い」は感情の座であり、そして、「知性」、物事を理解するところです。そして「力」、私たちの能力やすべてをもって『あなたの神である主を愛せよ。』と言うのです。つまり、ここでイエスが言われたことは、どのように神を愛するのかということです。あなたの全身全霊をもって神を愛しなさいということです。あなたの身も心も、そのすべてをもって神を愛せよと言うのです。イエスがマルコの福音書8:34で「自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。』と言われたのはそのことだと思いませんか？神が私たち罪人に望んでおられることは、私たちが当然あるべき姿に戻ることです。私たちを造ってくださり、私たちのようなものを愛してくださっているこの神を心から愛する者になることです。これまで私たちが愛して来たのは自分であり、自分の考えを尊重し、自分の思い通りに生きようとして来ました。けれども、それは神の前に明らかに間違った生き方だったのです。ですから、私たちはそれに対してNOと言って、そのような生き方を止めて、そして、この神を心から愛して、この神の權威に従って行こう、この神の教えに従って行こうとするのです。この神が私の神であり、この方が私の主人であるからこの方に従って行こうと、そのような主の招きなのです。それを私たちはみことばの中に見るのです。もう一度、マルコの福音書の最後のところを見ましょう。「自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」とあります。この「自分を捨てる」ということも、「自分の十字架を負う」ということも一度きりの決心です。「繰り返してこのようにしなさい」とみことばは教えていません。私たちは決めるのです。もうこのように自分中心の生き方は止めよう、そして、私は心からこの神を愛して、この方に従いましょうと、その一度きりの心からの決心によって私たちは救われるのです。

4) イエス・キリストについて行く

そして、イエスについて行くのです。このことばだけは現在形が使われています。このようにして私たちは歩み続けて行くのです。イエスの後をついて行こうとするのです。失敗したら、またその罪を悔い改めてイエスに従って行こうとするのです。ですから、私たちは日々の生活において、罪を告白しながら神の後をついて行こうとするのです。イエスに、そのみこころに、その導きに忠実に従い続けて行こうとするのです。まさにこれこそ、今私たちが見て来たこのイエスご自身の教えこそ、悔い改めを表わした生き方だと思いませんか？自分中心に生きてきた私たち、その私たちが神中心に生き始めようとするのです。自分の考えに沿って生きて来た私たちが、神のみこころに従って生きて行こうとするのです。まさに、テサロニケのクリスチャンたちがそうであったように…。Iテサロニケ1:9「**私たちがどのようにあなたがたに受け入れられたか、また、あなたがたがどのように偶像から神に立ち返って、生けるまことの神に仕えるようになり、**」。生ける神に仕える者なら、生ける神のみこころに従って、この方について行こうとすると言います。そのことをみことばは私たちに教えているのです。

ですから、悔い改めなくして、ただ天国に行きたいからイエス・キリストを信じるという、そのような信仰はみことばが教える信仰ではありません。それは悲しいことに、主が言われたこの狭い門というものを、人間的な勝手な知恵でもって、無理やりに広げたにすぎないのです。私たちはそのようなことをしてはいけません。確かに、このメッセージは人々を救いから遠のけてしまうかもしれません。でも、それは私たちが為すことではないのです。私たちが為すことは神のおことばを正しく伝え続けて行くことです。J・I・パッカーという神学者はこのように言います。「悔い改めは過去に対する単なる悲しみ以上のものである。悔い改めは精神と心の変化であり、自己を拒否し、自己が変わって救い主を王として仕える新しい生活である。」と。今私たちが見て来た通りです。だれを主として生きて行くのかです。自分ではないのです。この創造主なる神を私たちは主人として、王として、この方に従って行こうとするのです。

また、ジョン・マッカーサー牧師はこのように言います。「悔い改めとは人間の意志の方向転換である。すなわち、すべての不義を捨て、それに代わって義を追い求めようという決然たる決意である」と。なぜなら、みことばがそのように私たちに教えて来たではないですか？「自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」と。これまでの生き方をそのままにして、ただ天国に行きたいからイエスを信じますというのは、聖書の教えている福音ではありません。人間が作り出したものです。悲しいことに、そのようなメッセージが今語られ続けているのです。実は、1930年代にアメリカの有名人ヘンリー・アイアンサイドという先生がそのよ

うなことを警告しています。彼はこのように言っています。「人の罪深さと責任という恐るべき事実と取り組まず、あらゆるところのすべての人に悔い改めを命じない浅い説教は、浅い薄っぺらな回心者をもたらす。そのため、今日、新生の証拠を全く見せることのない、口先だけの告白者が無数に存在している」と。メッセージがこのようなことばだけの、口先だけの告白者、信仰者を生み出してしまったと言います。つまり、口では救われていると言いながら、実は救われていない人々を生み出しているということです。なぜなら、本当の救いというものは私たちが繰り返し学んで来ているように、それは明らかに証拠となって現われて来ます。なぜそう言えるか、救いは私たちの行ないによって得るのではなくて、神が私たちに救ってくださる、神のみわざだからです。ゆえに、神のみわざがその人のうちに始まるのです。行ないによっては救われません。でも、救われた人には、その証拠である行ないが伴うのです。これが神の言われる救いなのです。

2. 神の恵みによる救い

もう一度、今日のテキストに戻って、ローマ人への手紙3章で、パウロはこの救いはイエス・キリストによって与えられるもの、イエス・キリストを信じる信仰によって与えられるものだと言います。それだけではないのです。彼はこの23-24節に、この救いは恵みによるものであるということを言います。

A. 私たちの存在

1) 神の命令に反している

23節では、もう一度、私たちがいかに神の祝福をいただくにふさわしくない存在であるかということを確認にします。「**すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず**」と「**罪を犯した**」と言っています。この時制は、もうすでに罪を犯したという過去の歴史的事実に言及しています。これは事実だと言います。そして、その事実はもう私たちは疑うことはできません。なぜなら、パウロは繰り返して私たちの罪深さを示して来たからです。I列王記8:46には「**彼らがあなたに対して罪を犯したため——罪を犯さない人間はひとりもいないのですから——**」とあります。ソロモンは伝道者の書7:20で「**この地上には、善を行ない、罪を犯さない正しい人はひとりもいないから。**」と言います。ですから、パウロがまたここで教えていることは、私たちはみな罪を犯した、みな神に逆らう者として生まれ、そして、生きて来たということです。

2) 創造の目的にも反している

神の命令に逆らうだけではないのです。二つ目は、私たちは創造の目的に逆らう者であったということです。見てください、「**神からの栄誉を受けることができず**」と言います。口語訳聖書を見ると「**神の栄光を受けられなくなっており**」と訳されています。ここで言っていることはこの地上でのことです。新改訳では「**受けることができず**」と訳されているこのことばは「**持っていない**」とか「**不足する**」とかという意味です。マタイ19:20で、一人の金持ちの青年がやって来て「**先生。永遠のいのちを得るためには、どんな良いことをしたらよいのでしょうか。**」と尋ねたときに、イエスのお答えに対して彼はこのように言います。「**そのようなことはみな、守っております。何がまだ欠けているのでしょうか。**」。この「**欠けている**」ということばが、ここで言われている「**受けることができず**」と同じことばなのです。ですから、ここで言われている「**受けることができない**」ということは「**持っていないこと**」、「**不足している**」、「**欠けている**」ということなのです。ジョン・マレーという神学者はこのようなことを言います。「このことばは「**ない**」とか「**欠けている**」とか「**失われている**」という意味を持ったことばである。ゆえに、神の栄光を反映していないこと、すなわち、神の姿に一致していないことを言っているのだ」と。

つまり、ここでパウロが言わんとしたことは、神からの栄光を受けることができない、神からの栄光を持っていない、それに不足している、欠けている、私たちはその神の栄光を現わすという目的のために造られていながら、罪によってその目的を果たすことができなくなってしまったということです。もし、私たちが神が要求されていることを果たすことができるなら、私たちは神の栄光を現わします。でも、私たちは神の栄光を現わす者として造られていながら、罪を犯すことによって、神の栄光を現わすことができないのです。それにおいて不足した者になってしまったとパウロは言うのです。私たちが、私たちが造られた神に似た者として、また、その栄光にふさわしい生き方をしていないと言うのです。だから、イエスを信じた私たちはその神の栄光のためにすべてのことをしなさいということです。しかも、IIコリント3:18に「**栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。**」とある通り、神は私たちを変えて行こうとします。何のために？私たちが神の栄光を現わすためです。そのために造られた私たちがその目的を果たすことがなかったけれども、救われることによって、その目的を果たす者へと神が日々変えて行ってくれるのです。ですから、私たちは神の命令に逆らっただけではない、創造された目的にも逆らう者として生きて来たのだということです。

B. 神の対応

では、そのような私たちに対して神はどのように対応してくださったのでしょうか？それが24節に記されています。「**ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。**」。神はどのようなことをされたのか、三つのことが出ています。

1) 神の愛を示された：「恵み」

そのような私たちを神は一方向的に愛したと言います。「**ただ、神の恵みにより、**」とあります。ここで言われていることは、このような罪人に対する神の無限の、私たちには測り知ることのできない神の愛のことです。今、見て来たように、どこを見ても神に愛される資格もないし、愛される価値のないのが私たちです。でも神は、このような私たちに一方向的に愛を示してくれたと言うのです。

2) 神の犠牲を示された：「贖いのゆえに」

二つ目に、犠牲を払われました。この愛はことばだけのものではなかったのです。そこには行ないが伴いました。「**キリスト・イエスによる贖いのゆえに**」と。この「**贖い**」ということばは「代価を払って買い上げる」というような意味です。皆さんよくご存じのように、贖い金を払って身請けをする、代価を払って奴隷を解放するという意味をもったことばです。そして、イエス・キリストによる贖いと解放に関して、このことばは用いられています。神が私たちに対してイエス・キリストという犠牲を払って、このイエス・キリストのいのちという代価を払って、私たちをそこから買い上げてくださった、罪から救い出してくださったのです。

3) 神の救いを備えてくださった：「価なしに義と認め」

そして三つ目に、愛して下さっただけではない、犠牲を払われただけではない、救いを備えてくれたと言います。「**価なしに義と認められる**」と。価なしに、無償で、賜物として、無料です。これが神の応答だったのです。驚くべきことではありませんか？私たちに対して神が為されたことは、このような私たちを愛して、このような私たちのために喜んで犠牲を払って、そして、私たちにこの救いを備えてくれたのです。

クリスチャンの皆さん、まだクリスチャンでない人もよく覚えてください。神にこのような応答を、このような行為をしていただくような何かは私たち人間のうちにあるのではないのです。私たちのうちには全くないのです。神は私たちを見てこのようなことをしようなどとは全然思わないのです。でも、神はそのようなことをあなたや私のために為してくれたのです。なぜなら、これは神ご自身のお考えであり、神ご自身の選択だったのです。

「**キリスト・イエスによる贖いのゆえに**」と言います。この「**キリスト・イエスによる**」というこのことばは「キリスト・イエスにある」と訳した方がいいことばです。つまり、パウロが言っていることは、イエス・キリストによってのみ、この贖い、救いが与えられるのだということです。どんな罪人でも神の義をいただくことができます、救いをいただくことができます。その罪から救い出されてこの救いをいただくことができます。それは、イエス・キリストのみわざによるのです。すばらしい神の恵みです。すばらしい神の救いのみわざです。だから、私たちはそのことを信じ、そのことを感謝し、この主を崇めるのです。そのようにあなたは生きておられますか？